25PB-am149

血小板凝集能検査の注意点とその対策法

清水 美衣[1,2], ○今西 進[1], 原田 健一[1,3], 山本 正博[4]（[1]名城大薬，[2]横浜市立脳卒中神経脊椎セ，[3]名城大院総合学術，[4]横浜市立脳血管医療セ）

【目的】血栓症患者の血小板は機能が亢進している場合が多い。そのため、血小板凝集能検査は血小板機能を把握するために重要である。我々は脳梗塞患者の血液中に血小板凝集塊が出現している症例（Plt Agg+）を多く経験している。本研究は、基礎的に Plt Agg+サンプルを再現し、血小板凝集能検査への影響を検討するとともに、血小板凝集塊の存在を捉える方法を提案する。

【方法】対象は健常者５例および脳梗塞患者３例、心房細動の患者１例。血小板凝集能検査は透過光法を用いて行った。試薬は ADP、コラーゲン(Col)(Sigma)を用いた。検体は、クエン酸採血後、遠心により作成した血小板多血漿（PRP）（Pre）と、同サンプルをゆっくりと転倒混和し、FSC により血小板凝集塊が確認できた検体を遠心して作成した PRP（Post）を用いた。

【結果と考察】ADP 凝集は、ほとんどの検体において post は pre より凝集率が低下していた。コラーゲン凝集も同様に post は pre より凝集率が低かった。その時の post のクエン酸血中の血小板数は pre と比較して少なかった。採取した血液は pre、post ともに血液像を確認したが、post には多くの血小板凝集塊確認できた。血小板凝集塊が存在する検体を用いた血小板凝集能検査は本来の血小板凝集能よりも低く出る可能性があるため、その対策として 1)顕微鏡下での血小板凝集塊の確認、あるいは 2)FACS 用いた血小板凝集塊の検出が重要である。そして、Plt Agg が出現していた場合には、検査結果に Plt Agg+のコメントを提示するべきである。